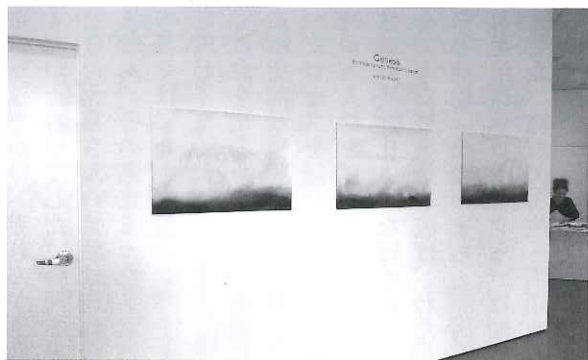


オークランド（ニュージーランド） 個展旅日記③

西
悟

二〇一五年八月七日、いよいよ私の個展が開催される日となった。ギャラリーに入り、作品の飾り付



ノースアート SEIGO 個展風景一部

けを見て、ほとんど完全なレイアウト、展示風景には驚いてしまった。学芸員の方に「大変だったでしょう」とねぎらいの言葉をかけると、彼女は「そうでもなかったですよ。三時間ほどで終了しました」と笑いながら答えてくれたのだ。私が飾り付けに携わってもこれほど上手くできないな—と思いつつ、—これぞプロフェッショナルな仕事だ—と感謝の気持ちでいっぱいになったのだ。

「SEIGO展」ジェネシス日本の高知から来たアーティストというタイトルで、ニュージーランドでは全く無名、誰も知らない日本の画家が有名なノースアートギャラリーです。訳だから、普通

に考えてみれば、とんでもない話である。それでもギャラリースタッフはパーティーのためにケータリングを用意し、最高の準備を整えてくれた。

ノースアートギャラリーは四つの展示スペースを持ち、ギャラリーとしてもかなり贅沢な空間を持っている。私の作品はそのうちの二つの部屋で展示されたのだった。それぞれの作品にゆったりとした空間が与えられ、じっくり鑑賞するための最高の空気を醸し出してくれていた。更にギャラリーの別の二部屋ではシンガポールから若手現代アーティストたちのグループ展を同時開催するという、珍しい組み合わせの国際色豊かな流れ

を作ってくれたのは嬉しかった。レセプションの中でシンガポールの若手アーティストとも、これから先、高知とシンガポールの間で美術交流が生まれる方向を探ってみようという話も自然と沸き上がり、ほんの僅かだが、私にとって新しいプロジェクトが頭の中をよぎる気配を感じたのだった。初めて訪れたオークランドの地で、小さな出会いがあり、そして大きな交流が生まれ、それが大きく



SEIGO 展レセプションパーティー

発展しそうな広がりを感じさせるギャラリーレセプションのひとつであった。そしてこの企画の裏には、ディレクター、ウエンディがシンガポールのグループ展と私の個展を同時開催することによって、私に大きなプレッシャーを感じさせないようにする粋な計らいがあったのだろう。

レセプションには地元の有名人アーティスト、美術愛好家もたくさん来訪し、パーティーでの楽しい美術談義、会話に花が咲いた。私よりも嬉しかったのが、多くの方が作品に対してテーマをしっかりと捉えてくれたことであった。今まで見たことも聞いたこともなかった作品に対し、先入観もなく、素直に「あなたの作品を見るとゆつたりとした時間の流れを感じるわ。とても気持ちの良い感覚ですね」、「微妙な色の変化が時間の移ろいを感じます。広い空気感を感じますね」といったコメントがたくさん聞かれたことだった。

彼らの素直な鑑賞の声の木霊し、この場所で展覧会の機会を与えられた喜びが溢れてくるのだった。日本では作品の値段のこと、人間

関係のこゝ通して作品を判断する愛好家も少なからずいるのは確かである。特に地方では作品とは別のところで芸術作品の善し悪しを見ようとする傾向もある。私自身そういった流れに少々うんざりしていた近頃でもあった。そんな時、ノースアートギャラリーという私にとって全く新しい地で作品を展示することができ、何の偏見もなく作品と向き合い、何の先入観もなく会話できる機会を与えられたことは、あらためて美術の素晴らしさを知るきっかけとなった。そして自分自身が創作活動を通して何を求めているのか確認でき、純粋に創作できることの喜びを大きく感じるのだった。



左からシヨーン・マクドネル、筆者、ロス・リッチー
(ニュージーランドの著名な画家)

シヨーン・マクドネルもこの展覧会を見て非常に喜んでくれた。まるで自分のことのようにしゃいでくれ、芸術関係の人を見かけるとすぐに紹介しようとし、交流が生まれるように話を繋いでくれたのだった。パーティーが終わって、シヨーンはホテルまで私を送ってくれたのだが、途中、居酒屋で祝杯をあげようということになった。金曜日の夜ということので、そこは多くの人でごった返していた。何とかテーブルを見つけ、二人で祝杯をあげた。

私はシヨーンに今回の機会を与えてくれたこと、再会できたことに、彼は私がオークランドにきてくれたこと、また高知でグループ展に参加できたことに、お互いが心地良い気持ち伝えたのだ。最初は本当に小さな細い糸のような繋がりがったのが、少しずつ太く大きな繋がりととなり、それが様々なところに枝分かれしていく、気持ちいい関係に成長していることに不思議な時間の感覚を改めて覚えるのだった。そしてシヨーンのみならず、私も次なる展開をお互いが起こしてみようとジョッキ

を高らかに交わしたのだった。

八月中旬、成田に向かう機上の中で、様々な思いが心の中に沸き上がってきた。ニュージーランドの人たち、風景、芸術などとの出会い全てが、私のこれからの創作活動に生かされるであろうと実感するのだった。そして今回の個展のみならず、様々な方面で私をサポートしてくれた多くの高知、オークランドの知人、友人たちの力添えによって今の私が在るのだと改めて感謝の思いに駆られるのだった。

夕刻七時過ぎ、十二時間のフライトの後、成田に降り立った。そして私はシャツの下にあふれ出てくる汗と熱気に真夏の中に投げ込まれたことを実感するのだった。

(終)

にし さとる

画家・土佐塾中高校美術専任講師